

父帰る

菊池寛

青空文庫

人物

黒田賢一郎

二十八歳

その弟

新二郎

二十三歳

その妹

おたね

二十歳

彼らの母

おたか

五十一歳

彼らの父

宗太郎

時

明治四十年頃

所

南海道の海岸にある小都会

情景 中流階級のつましやかな家、六畳の間、正面に
箆筥があつて、その上に目覚時計が置いてある。前に
長火鉢あり、薬缶から湯気が立っている。卓子台ちやぶだいが
出してある。賢一郎、役所から帰って和服に着替えた
ばかりと見え、寛くわんいで新聞を読んでいる。母のおたか
が縫物ぬいものをしている。午後七時に近く戸外は闇くらし、十月
の初め。

賢一郎 おたあさん、おたねはどこへ行つたの。

母 仕立物を届けに行つた。

賢一郎 まだ仕立物をしとるの。もう人の家うちの仕事やこし、せん

でもええのに。

母　　そうやけど嫁入りの時に、一枚でも余計ええ着物を持って行きたいのだろうわい。

賢一郎　（新聞の裏を返しながら）この間いうとった口はどうなつたの。

母　　たねが、ちいと相手が気に入らんのだろうわい。向こうはくれくれいうてせがんどつたんやけれどもう。

賢一郎　財産があるという人やけに、ええ口やがなあ。

母　　けんど、一万や、二万の財産は使い出したら何の役にもたたんけえな。家でもおたあさんうちが来た時には公債や地所で、

二、三万円はあつたんやけど、お父さんが道楽して使い出した

ら、笹につけて振るごとしじや。

賢一郎 （不快なる記憶を呼び起したるごとく黙している）……。

母 私は自分で懲こりこり々しとるけに、たねは財産よりも人間の

ええ方へやろうと思うとる。財産がのうても、亭主の心掛がよかつたら一生苦勞せいで済むけにな。

賢一郎 財産があつて、人間がよけりや、なおいいでしょう。

母 そんなことが望めるもんけ。おたねがなんぼ器量よしても、家うちには金がないんやけにな。この頃のことやけに、少し支度をしても三百円や五百円はすぐかかるけにのう。

賢一郎 おたねも、お父さんのために子供の時ずいぶん苦勞をしたんやけに、嫁入りの支度だけでもできるだけのことはしてや

らないかん。私たちの貯金が千円になったら半分はあれにやつてもええ。

母　　そんなにせいでも、三百円かけてやったらええ。その後でお前にも嫁を貰うたらわしも一安心するんや。わしは亭主運が悪かったけど子供運はええいうて皆いうてくれる。お父さんに行かれた時はどうしようと思つたがのう……。

賢一郎　（話題を転ずるために）新は大分遅いな。

母　　宿直やけに、遅うなるんや。新は今月からまた月給が上るといふとつた。

賢一郎　そうですか。あいつは中学校でよくできたけに、小学校の先生やこしするのは不満やろうけど、自分で勉強さえしたら

なんぼでも出世はできるんやけに。

母　お前の嫁も探してもろうとんやけど、ええのがのうてのう。園田の娘ならええけど、少し向うの方が格式が上やけにくれんかも知れんでな。

賢一郎　まだ二、三年はええでしよう。

母　でもおたねをほかへやるとすると、ぜひにも貰わないかん。それで片が付くんやけに。お父さんが出しゅっほん奔した時には三人の子供を抱えてどうしようと思つたもんやが……。

賢一郎　もう昔のことをいうても仕方がないんやけえに。

（表の格子開き新二郎帰つて来る。小学教師にして眉目秀れたる青年なり）

新二郎 ただいま。

母 やあおかえり。

賢一郎 大変遅かったじゃないか。

新二郎 今日は調べものがたくさんあって、閉口してしもうた。

ああ肩が凝った。

母 さつきから御飯にしようと思つて待つとつたんや。

賢一郎 御飯がすんだら風呂へ行つて来るとええ。

新二郎 (和服に着替えながら) おたあさん、たねは。

母 仕立物を持って行つとんや。

新二郎 (和服になつて寛くつろぎながら) 兄さん！ 今日僕は不思議

な噂をきいたんですがね。杉田校長が古新町で、家うちのお父さん

によく似た人に会ったというんですがね。

母と兄 うーむ。

新二郎 杉田さんが、古新町の旅籠屋はたごやが並んだる所を通つとると、前に行く六十ばかりの老人がある。よく見るとどうも見たようなことがあると思つて、近づいて横顔を見ると、家のお父さんうちに似ていたというんです。どうも宗太郎さんらしい、宗太郎さんなら右の頬にほくろがあるはずじゃけに、ほくろがあつたら声をかけようと思つて、近よろうとすると水神さんの横町へ、こそこそとはいってしもうたというんです。

母 杉田さんなら、お父さんの幼な友達で、一緒に槍の稽古をしていた人やけに、見違ふこともないやろう。けどもうお前、

二十年にもなるんやけにのう。

新二郎 杉田さんもそういうとつたです。何しろ二十年も会わんのやけに、しつかりしたことはいえんけど、子供の時から交際つきあうた宗太郎さんやけに、まるきり見違えたともいえんいうてな。

賢一郎 (不安な瞳を輝かして) じゃ、杉田さんは言葉をかけなかつたのだね。

新二郎 ほくろがあつたら名乗る心算つもりでいたのやつて。

母 まあ、そりや杉田さんの見違いやろうな。同じ町へ帰つたら自分の生れた家うちに帰らんことはないけにのう。

賢一郎 しかし、お父さんは家の敷居うちはちよつと越せないやろう。

母 私はもう死んだと思うとんや、家出してから二十年にな

るんやけえ。

新二郎　いつか、岡山で会った人があるというんでしよう。

母　あれも、もう十年も前のことじゃ。久保の忠太さんが岡

山へ行つた時、家のお父さんが、獅子や虎の動物を連れて興行
しとつたとかで、忠太さんを料理屋へ呼んで御馳走をして家
の様子をきいたんやて。その時は金時計を帯にさげたり、絹物ず
くめでえらい勢いであつたいうとつた。それからのはなんの音沙
汰もないんや。あれは戦争のあつた明くる年やけに、もう十二、
三年になるのう。

新二郎　お父さんはなかなか変つとつたんやな。

母　若い時から家の学問はせんで、山師のようなことが好き

であつたんや。あんなに借金ができたのも道楽ばかりではないんや。支那へ千金丹を売り出すとかいうて損をしたんや。

賢一郎（やや不快な表情をして）おたあさんお飯を食^{まんま}べましょう。

母　ああそうやそうや。つい忘れとつた。（台所の方へ立つて行く、姿は見えずに）杉田さんが見たというのもなんぞの間違いやろ。生きとつたら年が年やけに、はがきの一本でもよこすやろ。

賢一郎（やや真面目に）杉田さんがその男に会うたのは何日のことや。

新二郎　昨日の晩の九時頃じゃということす。

賢一郎 どんな身なりをしておったんや。

新二郎 あんまり、ええなりじゃないそうです。羽織も着ておらなんだということです。

賢一郎 そうか。

新二郎 兄さんが覚えとるお父さんはどんな様子でした。

賢一郎 わしは覚えとらん。

新二郎 そんなことはないでしょう。兄さんは八つであつたんやけに。僕だつてぼんやり覚えとるに。

賢一郎 わしは覚えとらん。昔は覚えとつたけど、一生懸命に忘れようと、かかつたけに。

新二郎 杉田さんは、よくお父さんの話をしますぜ。お父さんは

若い時は、ええ男であつたそうですな。

母　　（台所から食事を運びながら）そうや、お父さんは評判のええ男であつたんや。お父さんが、大殿様のお小姓をしていた時に、奥女中がお箸箱に恋歌を添えて、送つて来たという話があるんや。

新二郎　なんのために、箸箱をくれたんやろう、ははははは。

母　　丑の年やけに、今年は五十八じや。家にじつとしておれば、もう楽隠居をしている時分じやがな。

（三人食事にかかる）

母　　たねも、もう帰つてくるやろう。もうめつきり寒うなつたな。

新二郎 おたあさん、今日浄願寺の棕むくの木で百舌もずが鳴いとりましたよ。もう秋じゃ。……兄さん、僕はやつぱり、英語の検定をとることにしました。数学にはええ先生がないけに。

賢一郎 ええやろう。やはり、エレクトソンさんそこへ通うのか。

新二郎 そうしようと、思つとるんです。宣教師じやと月謝がいらんし。

賢一郎 うむ、何しろ一生懸命にやるんだな、父てておや親の力は借ら

んでも一人前の人間にはなれるということを知らせるために、勉強するんじやな。わしも高等文官をやろうと思うとつたけど、規則が改正になって、中学を出とらな受けられんいうことになつたから、諦めとんや。お前は中学校を卒業しとるんやけに、

一生懸命やってくれないかん。

(この時、格子が開いて、おたねが帰って来る。色白く
十人並以上の娘なり)

おたね ただいま。

母 遅かったのう。

おたね また次のものを頼まれたり、何かしとったもんやけに。

母 さあ御飯おたべ。

おたね (座りながら、やや不安なる表情にて) 兄さん、今帰つて来るとな、家の向う側うちに年寄の人がいて家の玄関の方をじーと見ているんや。(三人とも不安な顔になる)

賢一郎 うーむ。

新二郎 どんな人だ。

おたね 暗くて、分からなんだけど、背の高い人や。

新二郎 (立って次の間へ行き、窓から覗く) ……

賢一郎 誰かいるかい。

新二郎 いいや、誰もおらん。

(兄弟三人沈黙している)

母 あの人が家を出たのは盆の三日後であつたんや。

賢一郎 おたあさん、昔のことはもういわんようにして下さい。

母 わしも若い時は恨んでいたけども、年が寄るとなんと

しに心が弱うなつてきてな。

(四人は黙って、食事をしている。ふいに表の戸がガラ

ツと開く、賢一郎の顔と、母の顔とが最も多く激動を受ける。しかしその激動の内容は著しく違っている。

男の声 御免！

おたね はい！ （しかし彼女も立ち上ろうとはしない）

男の声 おたかはおらんかの？

母 へえ！ （吸いつけられるように玄關へ行く、以下声ば

かり聞える）

男の声 おたかか！

母の声 まあ！ お前さんか、えろう！ 変ったのう。

（二人とも涙ぐみたる声を出している）

男の声 まあ！ 丈夫たっしやで何よりじゃ。子供たちは大きくなった

やろうな。

母の声 大きゆうなつたとも、もう皆立派な大人じや。上つてお見ませ。

男の声 上つてもええかい。

母の声 ええとも。

(二十年振りに帰れる父宗太郎、憔悴したる有様にて老いたる妻に導かれて室に入り来る、新二郎とおたねとは目をしばたたきながら、父の姿をしみじみ見つめていたが)

新二郎 お父さんですか、僕が新二郎です。

父 立派な男になったな、お前に別れた時はまだ碌ろくに立ても

しなかつたが……。

おたね お父さん、私がたねです。

父 女の子ということはきいていたが、ええ器量じゃなあ。

母 まあ、お前さん、何から話してええか。子供もこんなに

大きゆうなつてな、何より結構やと思うとんや。

父 親はなくとも子は育つというが、よういうてあるな、は

はははは。

(しかし誰もその笑いに合せようとするものはない。賢

一郎は卓に倚よつたまま、下を向いて黙している)

母 お前さん、賢も新もようでけた子でな。賢はな、二十の

年に普通文官いうものが受かるし、新は中学校へ行つとつた時

に三番と降ったことがないんや。今では二人で六十円も取つてくれるし、おたねはおたねで、こんな器量よしやけに、ええ所から口がかるしな。

父　　そら何より結構なことや。わしも、四、五年前までは、

人の二、三十人も連れて、ずうと巡業して回つとつたんやけどもな。呉で見世物小屋が丸焼になつたために、えらい損害を受けてな。それからは何をしても思わしくないわ。その内に老おいさ

先きが短くなつてくる、女房子のいる所が恋しゆうなつてうか

うかと帰つて来たんや。老先の長いこともない者やけに皆よう頼むぜ。（賢一郎を注視して）さあ賢一郎！ その杯を一つさしてくれんか、お父さんも近頃はええ酒も飲めんでう。うん、

お前だけは顔に見おぼえがあるわ。(賢一郎応ぜず)

母 さあ、賢や、お父さんが、ああおつしやるんやけに。さ

あ、久し振りに親子が会うんじゃけに祝うてな。

(賢一郎応ぜず)

父 じゃ、新二郎、お前一つ、杯をくれえ。

新二郎 はあ。(杯を取り上げて父にささんとす)

賢一郎 (決然として) 止めとけ。さすわけはない。

母 何をいうんや、賢は。

(父親、激しい目にて賢一郎を睨んでいる。新二郎もおたねも下を向いて黙っている)

賢一郎 (昂然と) 僕たちに父親ておやがあるわけではない。そんなも

のがあるもんか。

父 (激しき憤怒を抑えながら) なんやと!

賢一郎 (やや冷やかに) 俺たちに父親てておやがあれば、八歳やっつの年に

築港からおたあさんに手を引かれて身投げをせいで済んだる。

あの時おたあさんが誤って水の浅い所へ飛び込んだればこそ、

助かっているんや。俺たちに父親てておやがあれば、十の年から給仕

をせいで済んだる。俺たちは父親てておやがないために、子供の時

になんの楽しみもなしに暮してきたんや。新二郎、お前は小学

校の時に墨や紙を買えないで泣いていたのを忘れたのか。教科

書さえ満足に買えないで、写本を持って行って友達にからかわ

れて泣いたのを忘れたのか。俺たちに父親てておやがあるもんか、あ

ればあんな苦勞はしとりやせん。

(おたか、おたね泣いている。新二郎涙ぐんでいる。老いたる父も怒りから悲しみに移りかけている)

新二郎　しかし、兄さん、おたあさんが、第一ああ折れ合っているんやけに、たいていのことは我慢してくれたらどうです。

賢一郎　(なお冷静に) おたあさんは女子やけにどう思つとるか

知らんが、俺に父てておや親があるとしたら、それは俺の敵かたきじや。俺

たちが小さい時に、ひもじいことや辛いことがあつて、おたあさんに不平をいうと、おたあさんは口癖のように「皆お父さんの故せいじや、恨むのならお父さんを恨め」というていた。俺にお父さんがあるとしたら、それは俺を子供の時から苦しめ抜いた

敵じや。俺は十の時から県庁の給仕をするし、おたあさんはマツチを張るし、いつかもおたあさんのマツチの仕事が一月ばかり無かった時に、親子四人で昼飯を抜いたのを忘れたのか。俺が一生懸命に勉強したのは皆その敵かたきを取りたいからじや。俺たちを捨てて行つた男を見返してやりたいからだ。父親てておやに捨てられても一人前の人間にはなれるということを知らしてやりた
いからじや。俺は父てておや親やっつから少しだつて愛された覚えはない。
俺の父てておや親は俺が八歳になるまで家を外に飲み歩いていたのだ。
その揚げ句に不義理な借金をこさえ情婦を連れて出しゅっぽん奔しゅっぽんした
のじや。女房と子供三人の愛を合わしても、その女に叶わなかつたのじや。いや、俺の父てておや親がいなくなつた後には、おたあ

さんが俺のために預けておいてくれた十六円の貯金の通帳かよいちようまで無くなっておつたもんじゃない。

新二郎 (涙を呑みながら) しかし兄さん、お父さんはあの通り、あの通りお年を召しておられるんじゃないけに……。

賢一郎 新二郎！ お前はよくお父さんなどと空々しいことがいえるな。見も知らない他人がひよつくり入ってきて、俺たちの親じゃというたからとて、すぐに父に対する感情を持つことができるんか。

新二郎 しかし兄さん、肉親の子として、親がどうであろうとも養うて行く……。

賢一郎 義務があるというのか。自分でさんざん面白いことをし

ておいて、年が寄って動けなくなつたというて帰ってくる。俺はお前がなんといつても父親ておやはない。

父

（憤然として物をいう、しかしそれは飾つた怒りでなんの力も伴っていない）賢一郎！ お前は生みの親に対してよくそんな口が利けるのう。

賢一郎 生みの親というのですか。あなたが生んだという賢一郎は二十年も前に築港で死んでいる。あなたは二十年前に父としての権利を自分で捨てている。今のわしは自分で築きあげたわしじゃ。わしは誰にだつて、世話になつておらん。

（すべて無言、おたかとおたねのすすりなきの声がきこえるばかり）

父　　ええわ、出て行く。俺だって二万や三万の金は取り扱う

てきた男じや。どなに落ちぶれたかというて、食うくらいなこ
とはできるわ。えろう邪魔したな。（悄然と行かんとす）

新二郎　まあ、お待ちませ。兄さんが厭だというのなら僕がど
うにかしてあげます。兄さんだって親子ですから、今に機嫌の
直ることはあるでしょう。お待ちませ。僕がどななことをし
ても養うて上げますから。

賢一郎　新二郎！　お前はその人になんぞ世話になったことがあ
るのか。俺はまだその人から拳骨の一つや二つは貰ったことが
あるが、お前は塵一つだって貰ってはいないぞ。お前の小学校
の月謝は誰が出したのだ。お前は誰の養育を受けたのじや。お

前の学校の月謝は、兄さんがしががない給仕の月給から払ってや
つたのを忘れたのか。お前や、たねのほんとうの父てておや親は俺だ。
父てておや親の役目をしたのは俺じゃ。その人を世話したければする
がええ。その代り兄さんはお前と口は利かないぞ。

新二郎　しかし……。

賢一郎　不服があれば、その人と一緒に出て行くがええ。

（女二人とも泣きつづけている。新二郎黙す）

賢一郎　俺は父てておや親がないために苦しんだだけに、弟や妹にその苦
しみをさせまいと思うて夜も寝ないで艱難したけに、弟も妹も
中等学校は卒業させてある。

父　（弱く）もう何もいうな。わしが帰って邪魔なんだろう。

わしやつて無理に子供の厄介にならんでもええ。自分で養うて行くぐらいの才覚はある。さあもう行こう。おたか！ 丈夫で暮せよ。お前はわしに捨てられてかえつて仕合せやな。

新二郎 （去らんとする父を追いて）あなたお金はあるのですか。晩の御飯もまだ食べとらんのじゃありませんか。

父 （哀願するがごとく瞳を光らせながら）ええわええわ。

（玄関に降りんとしてつまずいて、縁台の上に腰をつく）
おたか あつ、あぶない。

新二郎 （父を抱き起しながら）これから行く所があるのですか。
父 （まったく悄沈として腰をかけたまま）のたれ死するに

は家は要らんからのう……（独言のごとく）俺やつてこの家うちに

足踏ができる義理ではないんやけど、年が寄って弱つてくると、故郷の方へ自然と足が向いてな。この街へ帰ってから、今日で三日じやがな。夜になると毎晩家の前うちで立っていたんじやが、敷居が高うて入れなかつたのじや……しかしやつぱり入らん方がよかつた。一文なしで帰つて来ては誰にやつてばかにされる……俺も五十の声がかかると国が恋しくなつて、せめて千と二千とまとまつた金を持って帰つてお前たちに詫をしようと思つたが、年が寄るとそれだけの働きもできんでな……（ようやく立ち上つて）まあええ、自分の身体ぐらい始末のつかんことはないわ。（蹠そろう跟として立ち上り、顧みて老いたる妻を一目見たる後、戸をあけて去る。後四人しばらく無言）

母 (哀訴するがごとく) 賢一郎!

おたね 兄さん!

(しばらくのあいだ緊張した時が過ぎる)

賢一郎 新! 行ってお父さんを呼び返してこい。

(新二郎、飛ぶがごとく戸外へ出る。三人緊張のうちに待っている。新二郎やや蒼白な顔をして帰って来る)

新二郎 南の道を探したが見えん、北の方を探すから兄さんも来て下さい。

賢一郎 (驚駭きょうがいして) なに見えん! 見えんことがあるもの

か。

(兄弟二人狂気のごとく出で去る)

—
幕
—

青空文庫情報

底本：「菊池寛 短篇と戯曲」文芸春秋

1988（昭和63）年3月25日第1刷発行

入力：真先芳秋

校正：野口英司

1999年1月1日公開

2005年10月17日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

父帰る

菊池寛

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>